

論文

C・S・ルイスとJ・R・R・トルキーン —インクリングズとその周辺

安藤 聡

要 旨

It is well known among the readers of *The Chronicles of Narnia* or *The Lord of the Rings* that there was an informal literary circle called ‘the Inklings’ in Oxford between the early 1930s and 1963, and that C. S. Lewis and J. R. R. Tolkien were its central members. They would assemble twice a week: on Tuesday mornings they discussed literature, theology and the miscellaneous matters in their daily lives at the pub ‘the Eagle and Child’; and on Thursdays, from 8 pm to midnight, they gathered in Lewis’s college room to read aloud their newly-written manuscripts to be commented on and criticised by other members. In so doing the masterpieces of Lewis and Tolkien were written, but it is also true that there was some feud between these two great writers when their eminent fantasy novels were created. In this article we should like to review the biographical details of Lewis and Tolkien and the historical facts of the Inklings in order to illuminate the backgrounds of both *The Chronicles of Narnia* and *The Lord of the Rings*.

キーワード： インクリングズ, オクスフォード, C・S・ルイス, 『ナルニア国物語』, J・R・R・トルキーン, 『ホビット』, 『指輪物語』, イーグル&チャイルド, ラム&フラッグ

C・S・ルイス（一八九八～一九六三）の『ナルニア国物語』（一九五〇～五六）とJ・R・R・トルキーン（一八九二～一九七三）の『指輪物語』（一九五四～五五）を二〇世紀ファンタジー文学の最高傑作に含めることに、おそらく議論の余地はなかろう。そしてこの両者が、相互の多大な影響の下に書かれたこともまた、紛れもない事実である。しかしながら、ルイスとトルキーンの伝記を読み直してみると、実際にこれらの作品が書かれ出版された時期にはこの二人はそれまでよりずっと疎遠になっていたことが分かる。そしてこの両者の確執には、様々な背景が考えられる。

ルイス自身が『批評における一つの実験』で主張しているとおおり、作品の解釈や評価に作者を巡る伝記的事実を持ち込みすぎることには慎まなければならないが、それでもこの二人の偉大な作家兼研究者の関係と、彼らの作品が書かれた背景に関する情報をもう一度整理しておくことは『ナルニア国物語』と『指輪物語』いずれの読者にとっても興味深いことであろうし、強ち無駄なことでもなかろう。本稿では一九三〇年代前半からおよそ三十年の長きに亘ってオクスフォードに実在した文学サークル「インクリングズ」を中心として、ルイスとトルキーンおよびその周辺の文学者、研究者たちの関係について考察したい。

一 出逢いからインクリングズ黎明期まで

ルイスはアイルランド（現在の北アイルランド）の港湾都市ベルファーストで生まれ、三歳上の兄ウォーレン（一八九五～一九七三）とともに幼い頃から想像力の世界で遊んで育った。生家の子供部屋から見えるカースルレイ丘陵の遠景に感銘を受けたことはほとんどの伝記に記されている。九歳の時に母親を病気で失い、兄とともにイングランドの学校に入れられるが、学校生活には馴染むことが出来ず、結局はサリー州で隠居生活を送っていた父親の恩師の許に預けられ、そこで学んだのちにオクスフォード大学ユニヴァーシティ・コレッジで最初に哲学を、のちに英文学を専攻する。イングランドに渡った当初は、ベルファースト周辺とは異なったその「単調な」風景に息苦しさを覚えたが、ティーンエイジ初期を過ごしたウースターシャー州グレイト・モールヴァーンや中期を過ごしたサリー州グレイト・ブッカムの田園風景には大いに感銘を受けている。またこの頃、彼はキリスト教信仰を一度捨て去っている。この辺りの事情はルイスの自伝『喜びの訪れ』に詳しい。その後彼はオクスフォード在学中に第一次世界大戦のため一時期をフランスの戦地で過ごし、卒業後はオクスフォード大学モードリン・コレッジの研究者として、一九二五年からおよそ三十年間、主に中世からルネサンス時代の英文学を研究、教授した。

トルキーンは父親が仕事の関係で赴任していた南アフリカ共和国のブルームフォンテンで生まれ、三歳の時に母親に連れられて初めてイングランドに「帰省」し、その直後に父

親が急逝したことからそのままイングランドに定住することになった。母親の故郷に近いウェスト・ミッドランズ地方のセアハウル（現在はバーミンガム市の一部だが、当時はウースターシャー州の小村）で「古き良き時代」のイングランドの田園生活にトルキーンはある種の「懐かしさ」を覚えたとのちに述べている。十一歳の時に母親も病没し、以後は弟とともに叔母の許に、また数年後には後見人である神父の許に引き取られ、やがて奨学金を得てオクスフォード大学エクセター・コレッジに進学し、当初は古典語、比較言語学を、のちに英語英文学を学ぶ。在学中に第一次世界大戦のため従軍し、卒業後は『オクスフォード英語辞典』の編集助手、リーズ大学講師、同教授を歴任、その後一九二五年にオクスフォード大学ペンブルック・コレッジにアングロ・サクソン語教授として赴任する。

記録に残っている限り、二人の初対面は一九二六年五月一日の午後四時から開催された英文学科の会議でのことだった。ルイスとトルキーンは六歳近く年齢が異なり、前者が当時まだ駆け出しの若手研究員だったのに対して、後者は三十三歳の若さですでに教授という肩書きを持つ確立された研究者であった。この日オクスフォードではバス会社のストライキが執行されていて、ルイスはヘディントンの自宅からマートンまで歩いたという。ルイスはトルキーン的第一印象を「無害な男だが一度か二度痛い目に遭う必要がある」と書いている¹が、これは初対面のトルキーンに対する反感や敵意というよりも、ルイスにも当然あったであろう若い頃に特有の傲慢さの故と解釈した方が良からう。

「北方的なるもの」(Nothernness)への憧れや神話への関心、また同時代文化への批判的視点を共有するこの両者は程なく意気投合し、トルキーンは北欧叙事詩を読むサークル「コウルバイターズ」(Coalbiters:「石炭を囓る者たち」すなわち「暖炉に鬻り付いている者たち」の意)にルイスを誘う。メンバーはギリシア語学者のR・N・ドーキンズ、ルイスの恩師でもある辞書学のC・T・アニオンズ、比較言語学のG・E・K・ブローンホルツ、ルイスの学生時代からの友人でエクセター・コレッジ研究員のネヴィル・コグヒル、それにルイスと同郷の英文学者ジョン・ブライソンといった顔ぶれだった。またこの頃から、この読書会の集まりとは別に、トルキーンは毎週月曜日の午前中にモードリンにルイスを訪問し、文学や神学を語り合うようになった。この頃軍人として上海に赴いていた兄への手紙の中でルイスは、トルキーンとの話題を「英文学科の運営、互いの詩の批評、神学、英国の現状、ごく希に猥談と駄洒落に終始することもある」と説明している²。ルイスとトルキーンをある程度知る読者にとっては、この両者の間で交わされる猥談や駄洒落を想像することは困難であるかも知れない。だがこの二人はいずれもある種の伝記作家によって聖人化され過ぎる傾向があり、実際にはごく親しい二人の若い学者が学術的な話題の合間に猥雑な会話を楽しむということも決して不自然ではなからうし、またこの二人の言語に対する関心の高さを考えれば、時折地口などの言葉遊びに興じるのも当然のことと言えよ

う。

一九三一年のミクルマス学期が始まる頃（一〇月初旬）、ユニヴァーシティ・コレッジの学部生だったエドワード・T・リーンが未発表の原稿を朗読する会合「インクリングズ」を開催し、ルイスやトルキーンもゲスト講師として幾度か招待された。一九三三年の初夏にリーンが卒業するとこの会はそのまゝ解散となる。その年の秋頃ルイスとトルキーンは、学部生ではなく同僚や友人と未発表の原稿を朗読して批評し合う文学サークルを始めるが、この会合にインクリングズという名称を流用した。初期のメンバーとして彼らの他に退役して帰国したルイスの兄、ルイスの友人コグヒル（一八九九～一九八〇、チャーサーの『カンタベリー物語』の現代語訳などで有名）、同じくルイスの学生時代からの友人で在野言語学者のオウェン・バーフィールド（一八九八～一九九七、主著『詩の言葉—意味の研究』、『英語の中の歴史』）、優れたオースティン論でも知られるデイヴィッド・スイズル卿（慣用的表記では「セシル卿」、一九〇二～八六）、それにコグヒルを通して知り合ったレディング大学講師ヒューゴウ・ダイソン（一八九六～一九七五）らがいた。数年後にはルイスやトルキーンらの掛かり付けの医師ロバート・E・ハヴァード（通称「ハンフリー」、一九〇一～八五）や古典学者でのちに大学専属の説教師となるコリン・ハーディ（一九〇六～九八）、またモードリンの研究員で後年ウェストミンスター修道院の参事会員となるアダム・フォックス（一八八三～一九九七）が加わり、さらに数年後にはルイスの教え子でレディング大学講師でもありまた小説家としても知られるジョン・ウェイン（一九二五～九四）、トルキーンの三男クリストファー・トルキーン（一九二四～ ）、また詩人、小説家としても名高いオクスフォード大学出版局のチャールズ・ウィリアムズ（一八八六～一九四五）らが参加することになる。とはいえこのサークルには正規の会員がいたり会則があつたりしたわけではなく、彼らの他にも短期間、あるいは一回限りのゲストも数多存在し、またレディングから通って来るダイソンやウェイン、ロンドンから来るバーフィールドらは必ずしも毎回参加というわけではなかったし、さらにはコグヒルやスイズル卿の出席は割と気まぐれなものだったという。以後三十年間、インクリングズはルイスを中心とした（とトルキーンが明言している³）気の合う文学仲間の非公式な会合であり続けた。

二 ルイスの回心からインクリングズ黄金時代まで

一九四九年の晩秋まで、インクリングズの会合は週二回だった。火曜日の正午頃に彼らはセント・ジャイルズ通りのパブ〈イーグル&チャイルド〉（彼らは〈バード&ベイビー〉と呼んでいた）で文学論や気ままな雑談を楽しみ、木曜日の夜八時頃からモードリ

ンのルイスの部屋で未発表原稿の朗読と批評を行っていた。また一九二九年頃から毎年、ルイスと兄はイングランドやウェールズの各地を徒歩旅行していたが、これにインクリングズのメンバーの何人かが加わることも多かった。

トルキーンとの出逢いからインクリングズ開始までの数年間は、ルイスの生涯にとって最大の転機のひとつであった。遡って一九一七年に、大学入学後ほどなく陸軍に招集されたルイスは、宿舎として使われていたキープル・コレッジで同じくアイルランド出身のパディ・ムーアと出逢った。やがて彼らはフランスに送られ、そこでムーアは戦死、ルイスは負傷して帰国した。彼らは自分らのうちのいずれかが戦死した場合、生き残った方がその遺族の面倒を見ると約束していたらしい。ルイスはブリストルにいたムーアの母親と妹モーリーンをオクスフォードに呼び寄せ、一九三〇年にヘディントン・クウォリーの村外れに広大な敷地を有する邸宅〈キルズ〉を購入するまでの間、主にヘディントンの町の何カ所かの借家を転々として暮らした。

だがベルファーストにいるルイスの父親はムーア夫人らとの同居を必ずしも快く思っていなかったらしい。もとより母親の死以来、彼ら親子の関係はぎこちないものであり続け、ルイスが戦地で負傷した際にも父親に手紙で見舞いに来て欲しい旨を訴えたが、父親は一度たりとも現れなかった。当時のルイスの友人の中には、彼の話に時折登場する「ベルファーストにいる父」というのは彼が創り上げた妄想ではないかと疑う者もいた。ムーア母娘とのことが彼の父親との確執を一層深めたことは間違いない。このことに対してルイスは罪悪感を抱くようになり、一九二九年頃父親の病状が悪化してその死を予期するようになる、彼の無神論は揺らぎ始めたという⁴。

ある日モードリンからヘディントンの自宅への帰途、バスがセント・クレメンツ教会の傍らを過ぎてヘディントン・ヒルの坂道を上り始めたとき、ルイスは自分がある「選択」を迫られているということを実感した。このとき同時に、自分が「扉を開き、武具を脱ぎ捨て、手綱を緩めることを選ぶ」しかないということにも、気づいていたという。ここで言う「扉を開き、武具を脱ぎ捨て、手綱をゆるめることを選ぶ」とは、無神論を捨てて神の存在を自分の中に認めるということである。こうして一九二九年の初夏のある日、彼はモードリンの自室で突然「降伏し、神は神であるということ認め、跪いて祈った」のだった。この一連の経緯は、『喜びの訪れ』の第十四章に書かれている⁵。だが続く十五章で述べられている通り、この時の「回心」は「純粋な有神論に対してのみであって、キリスト教そのものに対してではなかった」⁶。ルイスがキリスト教信仰に回帰するに当たっては、トルキーンが多大な関与をしている。

モードリンの広大な敷地の小さな川に沿って、かつてジョウゼフ・アディソン（一六七二～一七一九）が好んで散策したことから「アディソンの歩道」と呼ばれる遊歩道があった。

一九三一年九月一九日の夜、ルイスはトルキーン、ダイソンの二人とともにここを散歩していた。この時に取り交わされた会話が直接の動因となって、また少し前に父親が病死したことから来る罪意識も相俟って、九月二八日に兄のサイドカーでウィプスネイド動物園に向かっている途上、彼はキリスト教信仰に回帰することを決意した。ルイスの著作のほぼすべては「キリスト教の神髄」に根ざして書かれているが、このような意味からも作家ルイスにとってインクリングズ、特にトルキーンの影響の重要性が明らかになろう。ウォルター・フーパーはこの文学サークルを「関心事を共有するキリスト教徒の集まり」と定義している⁷。

フーパーが言うように、インクリングズの黄金時代は第二次世界大戦の頃であった⁸。一九三九年九月に、それまでロンドンに拠点を置いていたオクスフォード大学出版局が空襲を避けるためにオクスフォードに移転して来た際に、ルイスは詩人・作家としても高名だった編集者ウィリアムズをインクリングズに誘い込んだ。ウィリアムズとルイスは以前からの知己であり、ルイスが『愛のアレゴリー』（一九三六）をオクスフォード大学出版局から出版した際にウィリアムズがその編集を担当していた頃、偶然にもルイスはウィリアムズの小説『ライオンの居場所』を（コグヒルから借りて）読んでいて、深い感銘を受けたことから両者の交友が始まったという。ウィリアムズの参加は様々な意味でインクリングズの転機となったと言える。

この「黄金時代」に先駆けて、ルイスは大人向けの神学的ファンタジー小説『沈黙の惑星を離れて』（一九三八）を、トルキーンは長編ファンタジー童話『ホビット』（一九三七）を、それぞれ出版していた。これらはいずれも草稿の段階からインクリングズの木曜夜の会合で朗読されており、参加者たちの（特にルイスとトルキーン相互の）批評と激励によって完成した作品と言っても過言ではなからう。

ウィリアムズの参加はルイスにとっては稔りあるものだったが、トルキーンにとってはそうではなく、この頃からルイスとトルキーンは次第に疎遠になり始めたという。ルイスとウィリアムズの友情にトルキーンが嫉妬したと考える批評家や伝記作家も少なくない⁹。

三 黄金時代の終焉

多くの批評家や伝記作家が指摘するように、一九四〇年代後半はルイスにとって不幸な時代だった¹⁰。過労のため体調はつねに優れず、外の世界は終戦直後の混乱に見舞われ、そればかりでなく終戦と同じ頃ウィリアムズが急逝した。さらに、ルイスにとっては「気難しい母親」的な存在であり続けたムーア夫人が病気がちになり、その介護でルイスの過労はより一層募ることとなったのみならず、インクリングズの仲間たちとの徒歩旅行や北

アイルランドへの帰省さえもままならない状態が何年も続いた。

一方でこの時期には、『ナルニア国物語』のいくつかの巻が水面下で創造されていて、同じ頃トルキーンもまた『指輪物語』を書き続けていた。このように文学史的な観点から見ればインクリングズの「黄金時代」はむしろこのルイスにとっての「不幸な時代」であった一九四〇年代後半と考えるべきなのかも知れないが、それでも創作者の集団としてのインクリングズ（すなわち木曜夜の集会）が終焉に向けて加速度をつけ始めたのもまたこの時期であったことは、否定しようもない事実である。

ルイスとトルキーンの関係ばかりでなく、インクリングズ全体の雰囲気がこの頃から次第に気まずいものになり始めたようだ。トルキーンはルイスが木曜夜の会で『ナルニア国物語』の第一巻『ライオンと魔女』を読み始めた頃から一貫して、この作品に対して批判的な見解を示し続けていた。トルキーンに言わせれば『ナルニア』は、キリスト教的神話とキリスト教以前の神話の「脈絡のない寄せ集めに過ぎない」とのことだ¹¹。確かにトルキーンの『ホビット』や『指輪物語』の舞台となる「ミドルアース」は一つの神話的体系に基づいて「準創造」された一貫した世界だが、ナルニアはそれとは全く異なった「多様性」と「対照」に満ちた世界なのであり、前者の基準によって後者を批判してもあまり意味はない。このことについても、ルイスの創造力に対するトルキーンの嫉妬と見解もある¹²。一方でルイスは『指輪物語』を全体としては高く評価していたが、細部（特に時折挿入される詩）に関しては厳しく批判していたという。トルキーンはルイスの批判に深く傷つき、結局ルイスの意見を受け入れることはなかった。ルイスがトルキーンの書いたものを総論として高く評価しつつ細かな点を辛辣に批判し、トルキーンが心を痛めつつルイスによる「添削」を無視したというのはこの時に限ったことではなく、この二人の交友が始まった頃に初めてトルキーンがルイスに自作の詩を見せて批評を仰いだ頃からのことだった。ルイスはのちに、トルキーンに影響を与えることは誰にも出来ない、と述懐したという¹³。またレディングにいたダイソンは戦後オクスフォードのマートン・コレッジの研究員となり、以前よりも頻繁に会合に参加するようになっていたが、トルキーンが『指輪物語』を朗読するたびに「妖精の話はもう沢山だ」といった内容の捨て台詞を吐いて場を沈黙させ、トルキーンもダイソンが出席しているときには原稿の朗読をしなくなった¹⁴。この頃レディングから参加していた若手メンバーのウェインは当時の会合を「あれほど素晴らしい経験はこれから先にもないだろう」と述懐している一方で、同じく若手メンバーだったクリストファー・トルキーンは「木曜夜にはつねに気まずさを感じていた」と証言している¹⁵。

『ナルニア国物語』や『指輪物語』のような種類のファンタジー小説は、当時の出版業界からは必ずしも歓迎されていなかった¹⁶。児童文学史の年表を概観すれば明白なとおり、

スーザン・クーパーなどのわずかな例外を除いて、一九四〇年代には優れたファンタジーは出版されていない——大人向けファンタジーとしては、ルイスの『ペレランドラ』（一九四三）やジョージ・オーウェルの『一九八四年』（一九四九）などがあったが、ルイスもトルキーンも北欧神話やケルト神話、あるいは『ベオウルフ』のようなファンタジー的、「別世界的」要素を多く含んだ物語文学が同時代に書かれていないことを以前から憂慮していて、そのような作品を他の作家が書かないなら自分たちが書こうという意思を共有していた¹⁷。そして一九五〇年代には『ナルニア国物語』と『指輪物語』ばかりでなくメアリー・ノートンの『床下の小人たち』（一九五二）、ルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子供たち』（一九五四）そしてフィリッパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』（一九五八）といった極めて優れた児童向けファンタジー小説が相次いで出版されたが、これはもちろん時代がこのような種類のファンタジーを求めていたということ¹⁸の他に、『ライオンと魔女』の成功が出版業界にこの種の作品への関心を引き起こしたということも十分に推測できよう。

このように、文学史的観点から見ればインクリングズにとって最も豊穡な時期とも言える一九五〇年代に向けての伏線が引かれていた一九四〇年代後半だったが、トルキーンの三男が証言しているように互いに対する批判や、前の時代のウィリアムズの参加によって均衡を崩した両者の関係が遠因となって、この時代がルイスとトルキーンの友情が急速に冷却し始めた時期でもあったことは否定できない。一九四九年十月二七日にモードリンのルイスの部屋に兄以外の誰も現れなかったことによって、木曜夜のインクリングズの会合は終焉を迎えた。

四 ルイスの結婚から晩年まで

オクスフォード教授就任から晩年まで、トルキーンの人生にはこれと言って劇的な要素が何もなく、とトム・シッピーは断言している¹⁹。ただオクスフォード着任の頃から彼と妻との関係は芳しくなく、そのため彼にとってはルイスとの友情だけが心の支えであり²⁰、一方で妻イーディスは夫とルイスとの関係に嫉妬していたという²¹。トルキーンと妻との確執の背景の一つは宗教的な問題であり、この頃彼女の中でカトリック信仰に対する反感が強まり始めたことがその動機となっただろう²²。

一方でルイスの私生活においては、木曜夜の会合の終焉に引き続いていくつかの重要な事件が起きている。まずは一九五〇年一月にムーア夫人が養老院に入り、その一年後に亡くなった。夫人がキルンズから去ったのとはほぼ時を同じくして、長年に亘るルイス作品の愛読者である米国の女性詩人ジョイ・デイヴィッドマン・グレンシャムからルイスの許に一

通の手紙が届いた。幾度かの文通ののち、一九五二年九月に彼女はオクスフォードを訪れ、モードリンに近いイーストゲイト・ホテルで昼食を共にした。このころ彼女は作家である夫ウィリアム・グレシャムとの離婚の手続きを進めていた。同じ年のクリスマスにルイスは彼女をキルنزに招待し、さらに次の年のクリスマスに彼は彼女の二人の息子ディヴィッドとダグラスをも招き、自宅に滞在させている。一九五四年八月にグレシャムとジョイとの離婚が成立し、一年後に彼女と息子たちはヘディントンの旧道に面した借家に定住した。ルイスはこの母子に英国永住権を与えるべく、一九五六年四月二三日にジョイと「民事手続き上の」結婚に踏み切る。これはあくまでも「書類上の」婚姻関係に過ぎず、婚姻届を提出したのちにも母と子供はヘディントンに住み続けた。トルキーンはこの結婚に反対し、思いとどまるよう幾度もルイスを説得しようとした。彼はこの結婚が「間違っている」旨を長い手紙に書き綴ったが、結局投函はしなかったという²³。いずれにせよ、この結婚によってルイスとトルキーンの間の亀裂がさらに深まったことは間違いない。

時は前後するが、一九五一年にオクスフォードで詩学教授の選挙があり、最終的にルイスとのちの桂冠詩人C・デイ＝ルイスとの決選投票となった。このポストには現職の詩人が求められていたことと、ルイスの作家としての人気や名声が裏目に出て大学関係者の間で疑惑の原因となったことから、一九四票対一七三票でデイ＝ルイスの勝利に終わった。ルイスはこれ以前にも幾度かオクスフォードで教授職に就く機会を逃している。その後一九五四年にケインブリッジ大学が中世・ルネサンス文学の講座を新設したが、これはルイスを引き抜くために設けられたポストだったという。オクスフォードに対して人一倍の愛着を持っていたルイスは逡巡の末、結局はケインブリッジへの移籍を決意する。トルキーンは長年に亘って、オクスフォードでルイスが正当に評価されていないと感じていたゆえに、この時ケインブリッジでの教授職を受け入れるようルイスを説得した。この年の一月に「時代区分について」と題する就任記念講演が行われ、中世とルネサンス時代を連続として捉えるルイスの文学史観が語られている²⁴。ケインブリッジのモードリン・コレッジ（このモードリンはオクスフォードのモードリンとは綴りが異なり、前者はMagdalene、後者はMagdalenである）に移籍したのちにルイスは学期中中の週日をケインブリッジで過ごし、週末や休暇中はキルنزに帰って来るという生活となった。この頃すでにインクリングズの集まりは火曜日の昼のみとなっていたが、そのような事情でこれは月曜日の昼に変更され、週末をキルنزで過ごしたルイスは月曜日に会合に出席したのちに午後早い時間の列車（その当時はこの二つの大学都市を結ぶ直通列車があった）でケインブリッジに向かった。

婚姻届を提出した半年後、ジョイの左大腿骨と胸部に悪性の腫瘍が発見され、オクスフォードのウィングフィールド病院で緊急手術を受けることとなった。この時点で彼女の

余命は三ヶ月とされていたという。ルイスはジョイと正式に式を挙げて本当の夫婦となって彼女らをキルنزに引き取ることを決意する。だが当時イングランド国教会では離婚歴のある者の再婚を認めておらず、二人の挙式には幾多の障害があったが、結局はルイスの教え子であるピーター・バイド牧師が一九五七年三月二日にジョイの病室で式を執り行った。余命三ヶ月だったはずの彼女はこの年の秋から冬にかけて奇跡的に回復し、翌年の夏には新婚旅行として北アイルランドを訪れ、さらに一九六〇年四月に二人は友人（ルイスの教え子でのちにルイスの伝記を著したR・L・グリーン）夫妻と共にギリシア旅行に出掛けている。しかしながらこの旅行から帰って程なく胸部の腫瘍が再発して、その後一時的に回復するも七月一三日にジョイは息を引き取った。

ジョイとの結婚以降、月曜日のインクリングズの会合の他はルイスとトルキーンが会うことは極めて希になり、ジョイの死後は幾度か個人的にも会っていたがかつての友情が戻ることはなかったという²⁵。トルキーンは一九五九年に教授職から引退しヘディントンに転居したが、トルキーン宅はヘディントンの住宅街の中でもオクスフォード寄りだったため、ルイスの住むヘディントン・クウォリーとは距離があった。一方でルイスは健康状態が思わしくなく、一九六一年一〇月から半年間ケインブリッジ大学を休職した。一九六二年一一月、トルキーンは自分の七十歳の誕生日にルイスを自宅に招こうとしたが、ルイスの体調のためこれは実現せず、翌月のクリスマスにやや回復したルイスがトルキーンを訪れたことが記録されている²⁶。この少し前、インクリングズの会合場所であったイーグル&チャイルドは改装工事を行い、彼らがいつも使っていた別棟の特別席が棟続きの一般席になったため、これ以降月曜日の彼らの会合はセント・ジャイルズを挟んだ斜向いにある<ラム&フラッグ>で行われるようになった。とは言えルイスの病状のこともあり、グリーンの日記によれば最後のインクリングズの会合は一九六三年六月一七日だった²⁷。ルイスはこの年の七月に心臓発作のため一時危篤状態になり、一〇月には正式にケインブリッジ大学を退職した。ルイスの引退は一〇月一四日付けの『タイムズ』紙上でも報道された。

この頃トルキーンは息子ジョンを伴ってキルنزにルイスを訪れたが、そのわずか数週間後の一一月二日にルイスは自室で静かに息を引き取った。小説家オールダス・ハクスリーとアメリカ合衆国大統領J・F・ケネディも同じ日に逝去した。ルイスの訃報は『タイムズ』には掲載されなかったが、それは兄が自分の購読する『テレグラフ』にしか通知を出さなかったためだという。この兄は物心がついて以来の親友でもあった弟を失った悲しみから立ち直れず、アルコール中毒症が悪化したためルイスの葬儀にも参列することが出来なかった。トルキーンは最後の十数年間のルイスとの確執を悔やみつつ、ルイスの励ましがなかったら『指輪物語』の完成はあり得なかったこと、また長年に亘ってルイスが彼

の「唯一の聞き手」だったことを認めている²⁸。トルキーンはその後『ニグルの木の葉』や『ウートン・メイジャーの鍛冶屋』（邦題は『星をのんだかじ屋』）などの小作品を発表する傍らで（『ホビット』や『指輪物語』の前編となる）『シルマリリオン』の執筆を続け、一九六八年には妻の関節炎の療養のためと、『指輪物語』による自分の世界的な名声が煩わしくなったことから、長年住み慣れたオクスフォード（ヘディントン）を離れて南海岸の保養地ボーンマスに隠遁した。一九七一年の妻の死後、マートン・コレッジが名誉研究員の地位と住居を用意したことから、一九七二年五月に彼はオクスフォードに戻り、そこで生涯の最後の一年を過ごすことになる。ルイスの時とは違ってトルキーンの訃報はもちろん『タイムズ』紙上でも伝えられたが、実はこの文章は十年以上前にルイスが書き残したものであったらしい。

五 <ナルニア> と <ミドルアース> の創造

ルイスは自身が認めているとおり、トルキーン（やウィリアムズ）から多大な影響を受けているが、ルイスがトルキーンに与えた影響はあまりなかったと考えられている²⁹。たとえばルイスの『沈黙の惑星を離れて』、『ペレランドラ』、『かの忌まわしき力』では、最初の二編にトルキーンの、最後の編にウィリアムズの影響が濃厚に見られる——そのためトルキーンは最終巻を評価しなかったとされている。一方で『ホビット』、『指輪物語』の舞台となる <ミドルアース> は確かにトルキーンの独創性のみによって「準創造」された神話的世界である。だがすでに触れたとおり、インクリングズ（特にルイス）の存在がなければこれらの作品の完成もあり得なかった、ということもまた否定できない。

ルイスが <ナルニア> を創造するに際しても、トルキーンは決して理解を示さず、むしろ終始批判的な態度を取っていた。『ナルニア』シリーズを執筆中のルイスを励ましたのはむしろグリーンだったという³⁰。ことによると、トルキーンの批評を仰がずに書かれたことによって、ナルニアはより一層ルイス的な要素を強め、トルキーンの影響から自由な状態で創造され得たということも言えるかも知れない。すでに言及したように、ミドルアースはひとつの神話体系に基づいた一貫した世界であり、一方のナルニアは多様性と対照によって成立している（良い意味で）雑多な世界なのである。

他方で、これもすでに言及したように、ルイスとトルキーンは北方的なるものへの憧れや神話への関心、また同時代文化に対する批判的見解などを共有していた。自分たちが好む種類の作品が同時代文学の中になかった故に独自の作品を創り出したという経緯も共通している。また言語に対する関心や、イングランド（またルイスの場合はアイルランドも）の田園への愛着をも、この両者は共有している。ナルニアとミドルアースの創造の原動力

となったのがこのような共通の関心事であったことは言うまでもない。

別世界であるはずのナルニアの風景はなだらかな丘陵が連続し、そこに榊、山毛櫨、秦皮などの樹木が点在し、金鳳花やブルーベルが咲き誇っている。森には駒鳥と赤栗鼠が、川には鱒がいる。これは典型的なイングランド（あるいはアイルランド）の田園地帯の風景と生態系である。例えば第一巻『ライオンと魔女』におけるタムナス氏の家でのティータイムやビーヴァー夫妻宅での食事の場面を見れば明確なおお、ナルニアの生活様式もまたイングランドの田園におけるそれに他ならない。別世界ナルニアは同時代文化に「毒されて」いないひとつの「理想的な」イングランドあるいはアイルランドの風景であり、それはルイスが生まれ育ったベルファースト周辺（カースルレイ、ホウリーウッドなど）や幼い頃に母親や兄と訪れたカースルロックやダンルース城周辺、少年時代を過ごしたモールヴァーンやブッカム、生涯の大半を過ごしたオクスフォード周辺、そしてインクリングズの徒歩旅行で見たイングランドやウェイルズ各地の風景の記憶によって創造された世界なのである³¹。そしてルイスが生きた時代は、都市拡大や自動車の普及によって田園風景が危機に瀕した時代にほぼ一致する。さらに私的な局面では、『ナルニア』が書かれた時代は自身の体調悪化のみならずムーア夫人の介護による過労、またそのためにアイルランドへの帰省や徒歩旅行すらも実現できなかったという、ルイスから田園風景が「奪われていた」時代だったと言えよう。このような観点から考えると、『ナルニア』は一面では「失われた田園風景」を回復する試みであったとも解釈できる。

『ホビット』と『指輪物語』もまた、失われた田園風景を回復する試みでもあった。南アフリカで生まれたにもかかわらず、多くの批評家が指摘するように、トルキーンは一貫してイングランドのミッドランズ地方西部を自らの郷里と認識していたという³²。オクスフォード周辺やイングランドの他の地方の田園にもルイスと同様に愛着を示していた——ただしルイスや他のインクリングズのメンバーとは歩く速度が合わなかったこともあって、またおそらくはホビット族のごとく出不精だったため、トルキーンが徒歩旅行に参加することは比較的希だったという。彼が幼年時代を過ごしたセアホウルは当時この地方の典型的な小村だったが、二十世紀前半に起こったバーミンガムの都市拡大で完全に市街地に飲み込まれた。（この世紀の前半の五十年間でバーミンガム市の人口が二倍になっている。）『ホビット』や『指輪物語』が書かれた頃にはすでに昔日の面影は残っていなかったということになる。オクスフォードもまた、トルキーンが学生として生活していた頃には「古き良き時代」のオクスフォードが辛うじて残されていたが、リーズでの数年間を経て彼が教授として凱旋したこの街は、郊外に大規模な自動車工場が出来たことから人口が急増し、中心街には車や人が溢れ、彼が嫌悪する「近代的な」都市の形相を帯び始めていた。トルキーンはこのように、「田園の喪失」を二度経験していることになろう。彼の代表的な

作品がその「喪失」の産物であることは想像に難くない。

疎遠になっていた時期に書かれたとは言え、『ナルニア』も『指輪物語』も作者同士の互いの存在がなければ完成し得なかったことは事実であろう。また、一見すると「閉鎖的な」研究者の世界で（例えばインクリングズは女性の参加を一切受け入れなかった）、現実世界から遊離した環境の中で書かれたような印象があるこれらの作品にも、世界大戦や田園の危機などの現実が様々な形で反映していることもまた事実である。一九二〇年代後半のオクスフォードでルイスとトルキーンが出逢い、一九六〇年代前半までを共に過ごしたという偶然がなければ、これらの作品も生み出されていなかったに違いない。ルイスにとって「最も幸福な時間」は三～四名の古くからの友人と古い服を着て徒歩旅行をして小さなパブに立ち寄る時、あるいは誰かのコレッジの部屋で夜更けまで無駄話や文学論、神学論に興ずる時であり³³、このようにルイスが他の友人をも含めた交友を好んでいたのに対してトルキーンはルイスの友情を独占することを望んでいたという³⁴。このような意識のずれが両者の確執の遠因だったと言えるかも知れない。いずれにせよ、『ナルニア』も『指輪物語』も両者の出会いと相互の影響、そして確執があった「ゆえに」このような名作になり得たということは間違いなからう。

註

1. Walter Hooper ed., *All My Road Before Me: The Diary of C. S. Lewis* (London: HarperCollins, 1993), p.393.
2. Colin Duriez and David Porter, *The Inklings Handbook* (London: Chalice Press, 2001), p.9.
3. *Ibid.*, p.4
4. ウォルター・フーパー『C. S. ルイス文学案内事典』山形和美監訳（彩流社、一九九八）九頁
5. C. S. Lewis, *Surprised by Joy* (Glasgow: Collins, 1977), p.182.
6. *Ibid.*, p.184.
7. Hooper, 'The Other Oxford Movement: Tolkien and the Inklings', in Joseph Pearce ed., *Tolkien: A Celebration* (London: HarperCollins, 1999), p.189.
8. Hooper, 'The Other Oxford Movement' p.187. デューリーズとポーターも同様の見解を示している。Duriez and Porter, *op. cit.*, p.3.
9. Humphrey Carpenter, *The Inklings: C. S. Lewis, J. R. R. Tolkien, Charles Williams, and their Friends* (London: George Allen and Unwin, 1978), p.120; George Sayer, 'Recollection of J. R. R. Tolkien', in Pearce, *op. cit.*, p.14.
10. A. N. Wilson, *C. S. Lewis: A Biography* (London: Collins, 1990), p.216; Duriez, *The C. S. Lewis Chronicles* (London: Darton, Longman and Todd, 2005), p.218.
11. Sayer, *Jack: C. S. Lewis and His Time* (London: Macmillan, 1988), p.189.

12. *Ibid.*, p.189; Sayer, 'Recollection of J. R. R. Tolkien', p. 14.
13. Carpenter, *Tolkien: A Biography* (New York: Ballantine Books, 1977), p.226.
14. Wilson, *op. cit.*, p.217.
15. *Ibid.*, p.216.
16. Roger Lancelyn Green and Walter Hooper, *C. S. Lewis: A Biography* (London: Souvenir Press, 1988), p.256.
17. Duriez, *J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis: The Story of a Friendship* (Stroud: Sutton Publishing, 2005), p.173.
18. 一九五〇年代のファンタジーとその歴史的背景については拙著『ファンタジーと歴史的危機—英国児童文学の黄金時代』（彩流社, 二〇〇三）の第七～九章を参照されたい。
19. Tom Shippey, *J. R. R. Tolkien: Author of the Century* (London: HarperCollins, 2001), p.xi.
20. Wilson, *op. cit.*, p.119.
21. Joseph Pearce, *Tolkien: Man and Myth* (London: HarperCollins, 1999), pp.52–53.
22. *Ibid.*, p.46.
23. Duriez, *J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis*, p.151.
24. Lewis, 'De Descriptione Temporum', in Hooper ed., *Selected Literary Essays* (London: Cambridge University Press, 1969), pp.1–14.
25. Duriez, *J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis*, p.155.
26. Derick Bingham, *C. S. Lewis: A Shiver of Wonder* (Belfast: Ambassador International, 2004), p.216.
27. Duriez and Porter, *op. cit.*, p.19.
28. Duriez, *J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis*, pp.vii, 43, 170.
29. Lin Carter, *Tolkien: A Look Behind The Lord of the Ring* (New York: Ballantine Books, 1969), p.18.
30. Green and Hooper, *op. cit.*, p.241; Sayer, *Jack: C. S. Lewis and His Time*, p.189.
31. ナルニアとイングランド, ウェイルズ, アイルランドとの関係については拙著『ナルニア国物語解説—C・S・ルイスが創造した世界』（彩流社, 二〇〇六）の特に第九章を参照されたい。
32. Duriez, *J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis*, pp.1–2; Shippey, *op. cit.*, p.x; Pearce, *Tolkien: Man and Myth*, p.154; Elwin Fairburn, 'J. R. R. Tolkien: A Mythology for England', in Pearce ed., *Tolkien: A Celebration*, pp.74–75.
33. Duriez and Porter, *op. cit.*, p.12.
34. Sayer, 'Recollections of J. R. R. Tolkien', p. 14.